

## 戦時下の職場と敗戦

昭和18年、戦争に勝つため、あらゆる農業団体は統合し、農業会が市町村に設立されました。私は県農業会に統合され、玉名支部に配属されました。

戦争は勇ましく、ラジオは軍艦マーチ、陸軍は「敵はいく一万ありとても」の軍歌を流し、意気軒昂いきげんこうし、その一方では玉砕の知らせに胸を痛めました。軍部は兵器産業と食糧増産は戦を支える車の両輪であると叱責を受けています。

働き盛りの男子が去った銃後は、女性と老人、子供まで田植えし、稲を刈り、米を供出し、その苦痛は言葉に表現できません。また、血の一滴、石油が不足し、山の松根を掘り出し、油を製造することも命じられ、困難な労力も加えられました。

職場では、弁当も米に雑穀を混ぜることも強制されます。神社から神霊を迎え、朝礼にはまず全員で「海行かば」を合唱し、参拝し支部長の話がありました。戦前も銃後もない、いつでも命を捧げる覚悟も要請されてきました。でも、心の中では、伊勢の神風を期待していました。

(昭和) 19年の忘年会と思います。全員で手分けして鳥二羽を買い、豆腐を加えてニワトリ汁です。血も捨てません。腸は刺身にし、骨は叩いて鍋に入れます。足のつま先まで加えました。酒は警察から二升もらい、久しぶりに口に入れました。「戦力がついた」と笑いが出ました。

最後に上司から、他に口外してはならぬと言葉もありました。今のグルメ料理に比べたら貧しい一品の肴でした。

8月15日、陛下から敗戦のお言葉があり、それを聞いた瞬間、一瞬にして大山が崩れ去る思いがしました。職場は、全員、夢遊病者のような雰囲気でした。

軍部は絶えず叫んでいた。負ければ囚縛と奴隷が強いられ、その苦痛に耐えなければならぬと信じている軍国青年の涙でした。

日を増すごとに、民主主義国家の有り難さ知るようになり、今日の平和を謳歌しております。そして、なぜ米国が教えた世界の範になる憲法九条を日本国外の人にも力を入れないか不思議です。これこそ命を捨て

ない積極的平和主義外交と信じます。

熊本市中央区 田尻五助